

古流にみる刀法の実際

指導／天真正伝香取神道流師範・大竹利典

現存する古流剣術の多くは鎧(よろい)をつけたときの刀法に近いといえる。「これらは現代剣道の動きに近い素肌剣法」は趣きが異なるが、刀の機能を活かす点では非常に実戦を踏まえたものである。古流の源流にあり、忠実にその流儀を伝えれる天真正伝香取神道流から基本的な刀法を探つてみた。

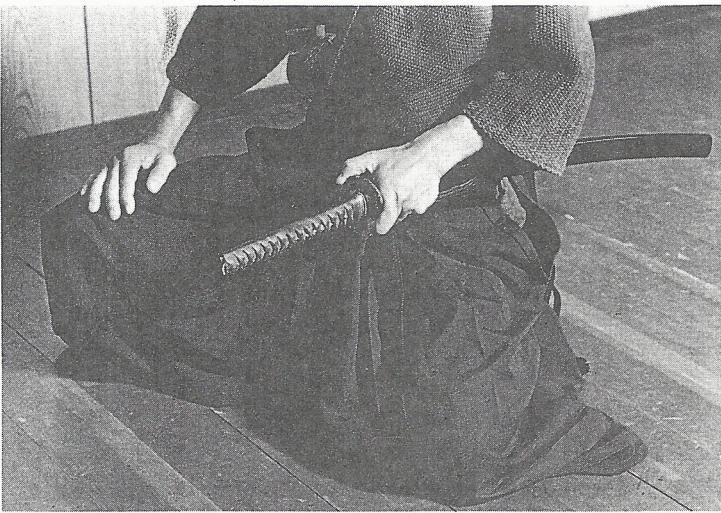
体勢、気勢とも烈しく斬る

実際に刀を持つて闘う場面では、世界のあらゆる格闘技と同様、厳しく俊敏な動きが必要となる。何百分の一秒の差が勝負を分けてしまう。斬られてしまつては終焉(おひや)で、竹刀剣道のように明日の試合、来年の大会があるわけではない。

居合術は、夜道を行くときや、屋内に居るとき、突然襲撃された場合を想定してつくられていく。最もすぐれた瞬発力で咄嗟に抜刀して敵を倒す術である。

敵はただ木偶のように立っている試し斬りの竹や巻きワラではない。何もしない仮想の敵でもない。ゆっくり抜いて威圧し、「さあ、これから斬りますよ」と、やっていられない場面である。剣尖(けんせん)が動くと同時に、刀は相手に当たっていなくてはならない。敵に体をかわされたら、転瞬、敵の刀は自分に届いているかも知れないのである。

技が遅れないためには、単なる前進や後退の動きだけではなく、左右への動きもできる千変万化の体さばきと、自由自在に刀を操ることが重要となる。



当流の居合腰

●姿勢を低くする
神道流の居合術では、片膝ついて姿勢を低くするものが居合腰である。

とくに暗い場所では、姿勢を低くすることが最有利となる。夜間の斥候は、低地から低地へと移動する。低地から高いところを透かして見ると、敵の姿をいち早く発見することができる。

まして、狭く天井の低い屋内では、片膝をついて戦うのが定石である。坐つてしたり、寝ている姿勢から起き上がり、すばやく刀をとつて、(灯を消し)、抜刀。敵の足を斬つたり、胴へ突き上げたりする動作が、立ち上がってからでは二挙動にも三挙動にも遅くなってしまう。片膝をついた低い姿勢は、相手が斬り込みにくく、こちらはスペースを広く使えるものである。

当流の居合腰は、まず直立の姿勢から、右足をやや前に出して、左膝をつく。両足のつま先を立て、体重の七割は左かかとにかけ、あとの三割は右かかとと左膝にかけるようにする。上体は前に傾かないようにして構える。

この構えは、前後左右、いずれの方向にもすばやく動ける基本の姿勢である。

刀は体の延長

咄嗟の攻撃に対応するには、常に刀を自分の体の延長として考えなくてはならない。

私たちは真暗闇でも、自分の手で間違わずに鼻をつまめる。両手の指を曲げてわし把みのかつこ

人差指で鍔を押さえれば敵に柄をとられても刀は抜けない。鯉口を切るときは拇指で鍔を押す



の敵に対する当て身もあるので鞘の動きは重要。

平鞘より、丸味のある丸鞘の方が動かしやすい。

● 鯉口の切り方

居合腰の構えから抜き付けるとき、左の手で鯉口を握り、図のように親指は鍔の内側からあて、人さし指は鍔にかけ、親指で鍔を押し出すようにして鯉口を切る。

この鯉口の切り方は、敵との間合が近いときや、群衆の中にいて、敵に柄をとられないともかぎらない場合にも有効。鍔にかけた人さし指が役に立つのである。

また、親指を刃の上にして鯉口を切ると指を切りやすい。とくに暗い場所ではその可能性がある。人さし指を鍔にかけ、親指で内側から鯉口を切るのは、どんな体勢からでも安全にすみやかに抜きつけるための基本といえる。

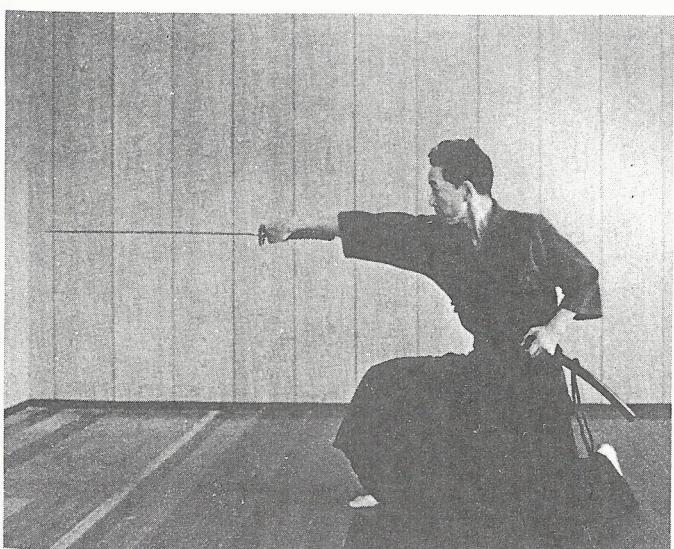
● 抜き付け

斬るために大切なことは、斬る物体に当たる刃の部分、すなわち切先三寸ほどの間に最高に力がかかることがある。最初から力を入れて柄を握りしめてはかえつて切先に力が入らない。片手で斬る場合、手首、肘、肩の関節は柔らかくして、目的的部分に当たる瞬間手の内が締まり、力が集中するようになると、ボクシングのパンチや空手と同様である。

当流で注目すべきところは、抜き付けた瞬間、

刀を水平に捧げてから垂直に立て、目釘がしっかりとしているかよく確かめて帶刀。鞘の三分の一くらいをさして立ち上がり、居合腰になる。右手を膝の上におき、左手で鍔元を握り、鞘ごと右肩近くまで二度上げ下げして刀を動きやすくさせ、次に栗形まで差し込む。

柄頭による前方の敵への当て身、鐔による後方



当流の抜き付けでは、腕と刀を真っ直ぐに伸ばす。柄が腕の下に入り、刀を打ち落とされることはない

で力いっぱい叩かれると、柄がはねて手の骨を折ったり、刀を落としてしまいかねない。柄と腕が重なり、刀まで一本の腕と化すのが敵の打ち込みに対する強く応じられる法である。

実戦での抜き付けは迅速このうえなく、納刀は残心を示しつつゆっくりでいい。

● 草薙の剣

自分の体と刀の折合いをつけるために行なう基本動作として、例えば当流居合術の一本目に「草薙の剣」がある。まず居合腰から右足を踏み出し、前方へ肩の高さに抜き付け、左から大きく振りかぶって諸手で斬り下ろし、もう一度振りかぶってこんどは右から斬り下ろし、右手で前方横一文字に刀をかざし（刃は上に向く）、左手の平で鎧部分を鎧元から物打ち付近まで一気になでつけ、そのまま左手で棟

本動作として、例えれば当流居合術の一本目に「草薙の剣」がある。

まず居合腰から右足を踏み出し、前方へ肩の高さに抜き付け、左から大きく振りかぶって諸手で斬り下ろし、もう一度振りかぶってこんどは右から斬り下ろし、右手で前方横一文字に刀をかざし（刃は上に向く）、左手の平で鎧部分を鎧元から物打ち付近まで一気になでつけ、そのまま左手で棟

を受けるようにして頭上につけ（鳥居の構え）右手を前方にすばやく伸ばして当て身（柄頭で相手の顔面や水月を突くのである）。そして左手を柄にほどし、また振りかぶつて諸手で斬り下ろす。現代剣道には構えや当て身があるが、実際の刀法の一端がうかがえる。

受ける間があれば斬れ

実際の立合（剣術）では、体とともに、刀の切先から柄頭までありますところなく役立てて、峻烈な技を繰り出し、自分を有利に導くことだ。

● 刀の持ち方

刀を清眼に構える場合、両手には力を入れすぎず、左右の手の小指、薬指をしめるような感覚で

ごく自然にする。当流の極意に“握り卵の手の内”というのがあるが、卵が手のうちにあるように柔らかく握るのは、現代剣道でもいわれているとおり。

ただし、右手は鶴元、左手は柄頭いっぱいに握る。一握りも柄頭を余すような握り方は、斬れ味が悪くなり、柔軟な対応はできない。斬る場合だけではなく、敵の武器をはね返すときなど、テコの原理による力が働きにくい。手首にも無理がきて、すべての動作がにぶくなってしまう。

● 構え

基本の構えである清眼は、肩や肘は自然にして、切先は相手の顔面につける。足は膝に少しゆるみをもたせ、両かかとは付いて、右足はほぼ正面に向ける。足は自然、やや撞木（しよくぼく）に近くなるが、この

足の開きがないと実際に刀で斬るときの踏ん張りは利かない。

また、古流剣術の多くは甲冑をつけたときを想定した刀法だから、軽いものでも十キロ以上はある甲冑をつけて構える場合、現代剣道のようにかかとを浮かしてはいられない。

清眼の構えのほかに、五行の清眼（清眼より左半身になり、腰をおとして太刀を右側に水平に構える）、左上段などそれぞれの構えや、左半身に抱くように構える）、陰（左足を前に出し、右拳は耳より約十センチ離して太刀を垂直に立てる）、捨（左半身になり、腰をおとして太刀を右側に水平に構える）、左上段などそれぞれの構えや、左半身に



刀の握り方。左手で柄頭をつつむ。刀の自在の動きが可能



五行の清眼（正眼）の構え。両かかとを地につけ、左足はやや開く。なお、当流の表技は甲冑剣法で、裏技は素肌剣法に通ずる

なつて太刀を右手で頭の右側に付け、左手は前方

へ肘をのばして、手の平をパッと広げて相手の顔面に付ける「笠隠れの構え」などがある。

どの構えも、相手と自分を結んだ中心線の上に

剣先がくるようにするのがポイントである。

●体さばきでかわす

相手が斬りつけたとき、刀で受ける暇があれば、必ずこちらから斬る時間があるということです。まず体さばきでかわしづま、斬るか突くという攻撃をする。

そもそもできる限り小さく、相手の刀と紙一重のところでかわすくらいを「良し」としている。つまり、斜め前後・左右に体をさばくとき、相手と対してその線を結び、必ず縦長の長方形になるようすることである。もちろん、どう体をさばこうと、剣先は相手と自分を結んだ中心線上におかなくてはならない。

大きく体をかわすと、リズムも乱れ、体にムリが生じ、崩れてしまう。これでは攻撃を仕かけることができない。そうならないためのポイントは、要するに相手の拳をさけることだ。刀はすべて拳から動く。その拳を観て、拳の動きから自分の体をはずすのである。

当流の表の技では、すべて退って相手の刀をかわすが、奥になると、前へ踏みこんでかわし、そのまま突きにいくような技になる。刀をもたなくとも、踏みこみようによつて、合氣道の呼吸で相手のふところに飛びこみ、組み伏せることもできる。前に出る足さばきがわかる例として、上段の敵の左小手と横面にとぶ技がある。

まず、相清眼から敵上段となるとき左足を前にして「捨の構え」となり、間合をみて、すかさず敵の左体側の方へ右足を大きく踏み出し、左小手を打つ。相手がなおも打つてくるようなら、そのまま左横面にのびてもいい。

●棟ではじく

体をかわしながらの攻撃ができないから刀の棟で相手の刀をはじき返す。刀の構造と機能のところでも述べたが、下から上にはね上げる力は少なくすみ、棟打ちとちがつて刃切れの心配もない。

●刃で受ける

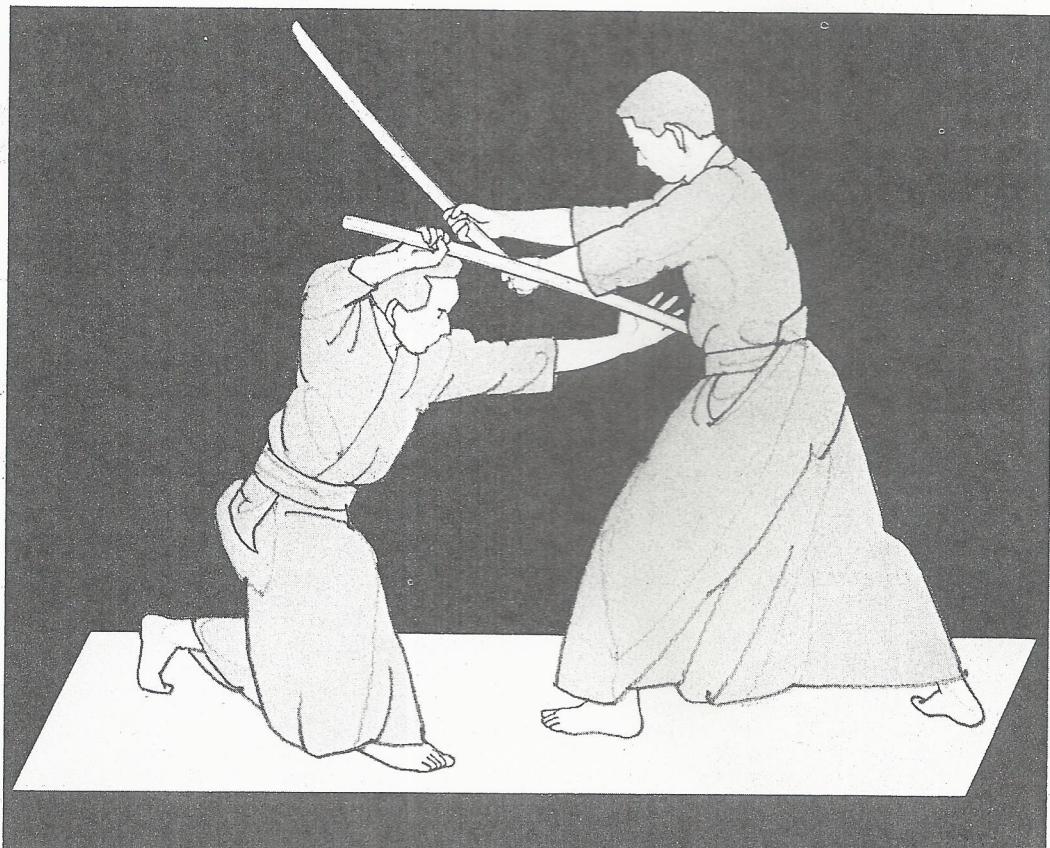
棟ではね返すこともかなわず、相手の刀を止むを得ず受けるときは、必ず刃の部分で受けのことだ。

戦場刀を何本見ても、

鎧に疵のあるものはない。鎧に疵のないものはない。しかし、棟や刃には疵がある。そのうち、刃こぼれが刀の真ん中から先の方にあるのは、自分が打ちこんだときの疵。元に近い方にあるのは受け疵とみていいだろう。

刃で受けければ、当然双方の刀に刃こぼれが生じる。が、それを嫌つて鎧で受けたりしたら、自分の刀は飛ばされるか、すぐにそこから折れてしまふ。刀身は、側面からの衝撃に弱い。刀の刃を相手の方に向け（鎧を真上から打たれる）、片手で受け流すような使い方は、命のやりとりをする場面では通用しない。

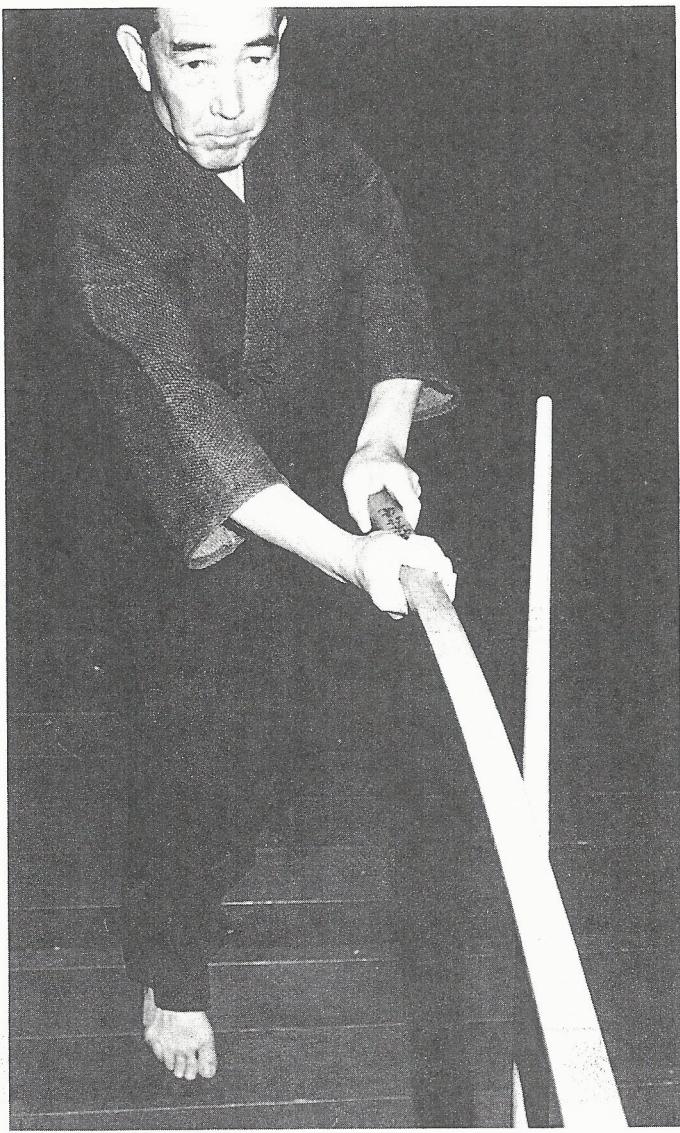
当流では、左手の平を刀身に当てた鳥居の形で



受け、そのまま刃を相手の刀の反りに沿わせて相手の腹に突きこむ技もある（後段「反りを利用した攻撃」参照）。

●どこを斬るか

甲冑には、それを着ての動きを容易にするために、多少の弱点がある。この弱点をつくように考案されているのが神道流の表技である。



刀の反りを活かす。刃を左に向けて突き込めば、自然に敵の剣先をかわせる。右小手を狙われれば、刃を逆に向けて突けばよい

首を打つには、刀の刃を両あごの下の頸動脈に摺りこむ。胴打ちは、鎧の胴と草摺の間約十センチほどが糸で、そこを打つ。胴というよりも腰を打つわけだ。小手や腕を打つ場合は、鉄板や鎖でおおわれていらない内側を打つ。内側は糸の縫い目だけで、しかも動脈に最も近い。足は佩楯の間から内股を突くのである。

腹を突く場合は、刀を左に向け、刀を横にする

のが強く突ける。

● 反りを利用した攻撃

刃筋が通っていれば、どう斬つても必ず斬れるが、刃筋は反りがあるから生かされるものでもある。刀の反りを使って相手の力をうまく利用することが、刀法の要諦といつてもいい。

例えば、互いに清眼の構えのとき、敵が腹を突いてくるのを、右足を少し開き、刀の刃の方を敵の刀にそわせてグッと突ければ、相手の切先は流れ、ボクシングのカウンターパンチのようにズバリ相手の腹を突くことができる。

あるいは相清眼から、やはり同じように反りを利用して押し、相手の剣先がはずれたところを、すかさず左小手に打つ技もある。

また、互いに腰の高さで打ち合つたら、相手の刀を巻き上げ、左足を出して、裏から伸び、相手の首を斬る技も当流にはある。裏から反りを利用しても右に払うと、相手の刀は剣先がはずれたまま前にひっぱられ、そこを攻めるという手もある。

いずれにせよ、反りを利用した攻めは竹刀剣道では把握できない。木剣を使つた形稽古や、刀を使う本来の剣道修行に待つほかはない。

そうして、技を極め、最後には武器を使わずに、戦わずして勝つ境地にまで達することが「兵法は平法なり、男子たるもの平法を不知してあるべからず」の実践ということになる。